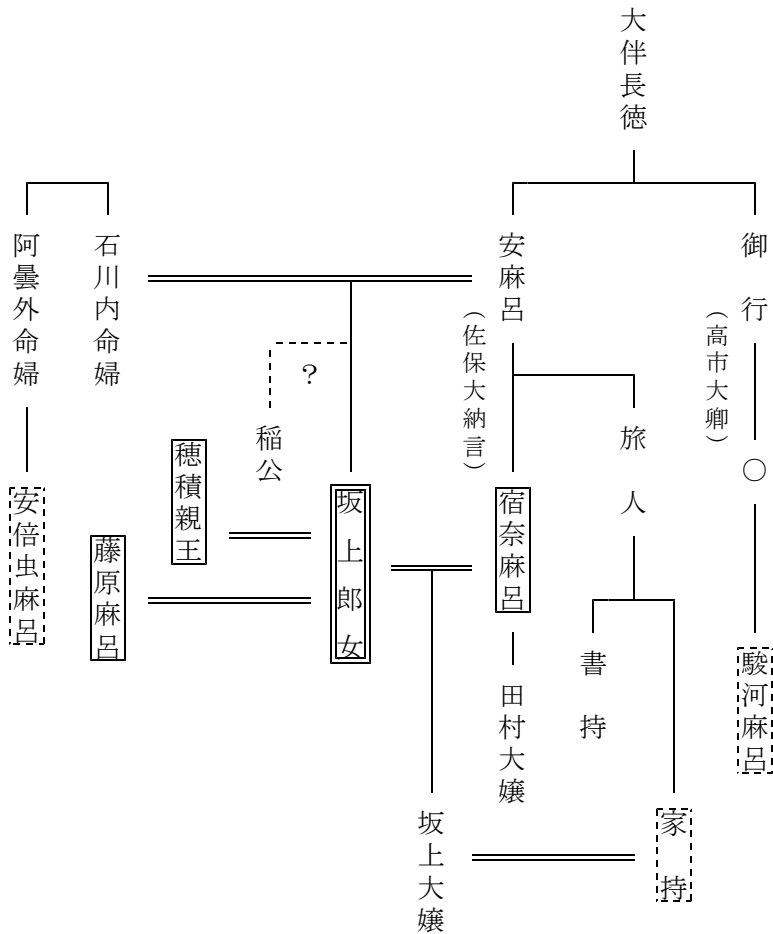


大伴坂上郎女

北川和秀



①右、郎女は、佐保大納言卿の女そ。初め一品穂積皇子に嫁ぎ、寵びをうくること儔なし。皇子薨りましし後、藤原麻呂大夫この郎女を娉ふ。郎女は、坂上の里に家む。よりて族氏号けて坂上郎女といふ。(四・五二八左注)

②右、田村大嬢と坂上大嬢と、并に右大弁大伴宿奈麻呂卿の女そ。卿、田村の里に居む。号を田村大嬢と曰ふ。但し、妹坂上大嬢は、母、坂上の里に居む、仍りて坂上大嬢と曰ふ。時に姉妹諮問ひに、歌を以ちて贈答す。(四・七五九左注)

③右、坂上郎女は、佐保大納言卿の女そ。駿河麻呂は、この高市大卿の孫そ。両卿は兄弟の家、女孫姑姪の族そ。ここを以ちて、歌を題し送り答へ、起居を相問ふ。

(四・六四九左注)



④右、大伴坂上郎女の母石川内命婦と、安倍朝臣虫満の母安曇外命婦とは、同居の姉妹、同気の親そ。これによりて郎女と虫満と、相見ること疎からず、相談ふこと既に密なり。聊か戯れの歌を作りて問答をなすそ。(四・六六七左注)

大伴坂上郎女関係年表

西暦	年号	天皇	事項
六九四	持統八	持統	藤原宮に遷都
六九五	持統九	持統	
六九六	文武一〇	文武	
六九七	文武二	文武	
六九八	文武三	文武	
六九九	文武四	文武	
七〇〇	文武五	文武	
七〇一	文武六	文武	
七〇二	文武七	文武	
七〇三	文武八	文武	
七〇四	文武九	文武	
七〇五	文武一〇	文武	
七〇六	文武一一	文武	
七〇七	文武一二	文武	
七〇八	文武一三	文武	
七〇九	文武一四	文武	
七一〇	文武一五	文武	
七一一	文武一六	文武	
七一二	文武一七	文武	
七一三	文武一八	文武	
七一四	文武一九	文武	
七一五	文武二〇	文武	
七一六	文武二一	文武	
七一七	文武二二	文武	
七一八	文武二三	文武	
七一九	文武二四	文武	
七二〇	文武二五	文武	
七二一	文武二六	文武	
七二二	文武二七	文武	
七二三	文武二八	文武	
七二四	文武二九	文武	
七二五	文武三〇	文武	
七二六	文武三一	文武	
七二七	文武三二	文武	
七二八	文武三三	文武	
七二九	文武三四	文武	
七三〇	文武三五	文武	
七三一	文武三六	文武	

藤原宮に遷都

大宝律令制定
大宝律令施行

大伴安麻呂、大納言兼大宰帥

但馬皇女没。大伴宿奈麻呂從五位下（21歳以上）

平城京に遷都。大伴旅人46歳

古事記撰進

大伴安麻呂没

穗積親王没。藤原麻呂21歳

この頃、大伴家持生

日本書紀撰進

（大伴宿奈麻呂37歳以上）

山上憶良、この年筑前守任官か

大伴旅人、大宰帥任官

旅人の妻病死

長屋王の変

旅人邸で梅花の宴。大伴旅人大納言任官帰京

大伴旅人没

七三二	七三三	七三四	七三五	七三六	七三七	七三八	七三九	七四〇	七四一	七四二	七四三	七四四	七四五	七四六	七四七	七四八	七四九	七五〇	七五一	七五二	七五三	七五四	七五五	七五六	七五七	七五八	七五九
四	五	六	七	八	九	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	三	四	五	六	七	八	元	二	三
													孝														
													謙														
													家持に贈る歌。家持従五位上。陸奥国黄金献上 坂上郎女の作歌年代の分かる最後の歌														
													家持、少納言、帰京 東大寺大仏開眼														
													難波宮に遷都 都を平城京に戻す 家持、越中守														
													佐保の宅で作った歌 この頃、家持（16歳位）初月の歌														
													尼理願の死を悼む歌														
													藤原麻呂没、43歳 家持、内舎人 高円山で作った歌														
													広嗣の乱。恭仁京に遷都。家持と大嬢は既に夫婦														
													万葉集最終歌														
64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37

【藤原麻呂との贈答歌】

京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首 卿、諱を麻呂と曰ふそ（そのうちの一首）
 ①むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも（四・五二四）
 大伴郎女の和ふる歌四首

②佐保河の小石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか（五二五）

③千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波止む時も無しわが恋ふらくは（五二六）

④来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを（五二七）

⑤千鳥鳴く佐保の河門の瀬を広み打橋渡す汝が来とおもへば（五二八）

【相聞】

大伴坂上郎女の怨恨の歌一首 短歌并せたり（長歌省略）

①初めより長くいひつたのめずはかかる思に会はましものか（六二〇）

大伴坂上郎女の歌六首（そのうちの五首）

②われのみそ君には恋ふるわが背子が恋ふとふことは言の慰そ（四・六五六）

③思はじと言ひてしものを朱華色の変ひやすきわが心かも（六五七）

④思ふとも験もなしと知るものをなにしかここだわが恋ひわたる（六五八）

⑤汝をと吾を人そ離くなるいで吾君人の中言聞きこすなゆめ（六六〇）

⑥恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば（六六一）

大伴坂上郎女の歌七首（そのうちの二首）

⑦今は吾は死なむよわが背生けりともわれに寄るべしと言ふといはなくに（四・六八四）

⑧青山を横切る雲の著ろくわれと咲まして人に知らゆな（六八八）

大伴坂上郎女の歌一首

⑨夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ（八・一五〇〇）夏相聞

【九州での作（妻を亡くした兄旅人のために九州へ）】

（天平二年）冬十一月、大伴坂上郎女の、帥の家を發し上道して、筑前国宗形郡名児山を越ゆる時に、作る歌一首

○大汝 少彦名の 神こそは 名づけ始めけめ 名のみを 名児山と負ひて わが恋の 千重の一重も 慰めなくに（六・九六三）

【少年家持（甥）との交流】

大伴坂上郎女の、姪家持の佐保より西の宅に還るに与ふる歌一首

①わが背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで（六・九七九）

同じ坂上郎女の初月の歌一首

②月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも（六・九九三）

大伴宿祢家持の初月の歌一首

③振仰けて若月見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも（九九四）

【天平年間の作】

大伴坂上郎女の、元興寺の里を詠ふ歌一首（天平五年）

①故郷の飛鳥はあれどあをによし平城の明日香を見らくし好しも（六・九九二）

②（天平）七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願が死去れるを悲しび嘆きて作る歌一首

短歌并せたり（歌は省略）

右は、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感じて聖朝に帰化す。時に大納言大將軍大伴卿（安麻呂）の家に寄住して、既に数紀を逕たり。ここに天平七年乙亥を以ちて、忽に運病に沈みて、既に泉界に趣く。ここに大家石川命婦、餌薬の事に依りて有間の温泉に往きて、この喪に会はず。ただ、郎女独り留りて屍柩を葬送すること既に訖りぬ。よりてこの歌を作りて温泉に贈り入る。

大伴坂上郎女の歌一首

③酒坏に梅の花浮け思ふどち飲みての後は散りぬともよし（八・一六五六）冬相聞

和ふる歌一首

④官にも許し給へり今夜のみ飲まむ酒かも散りこすなゆめ（八・一六五七）冬相聞

右は、酒は、官禁制していはく、京中の閭里、集宴すること得ざれ。但し親親一二飲樂するは聴許すといへり。これによりて和ふる人この発句を作る。

【娘の母として】

大伴宿祢稻公、田村大嬢に贈る歌一首 大伴宿奈麻呂卿の女そ

①相見ずは恋ひざらましを妹を見てもとなかくのみ恋ひばいかにせむ（四・五八六）

右一首、姉坂上郎女の作。

大伴坂上郎女、跡見庄より、宅に留まれる女子の大嬢に賜ふ歌一首 短歌并せたり

②常世にと わが行かなくに 小金門に もの悲しらに おもへりし わが児の刀自を
ぬばたまの 夜昼といはず 思ふにし わが身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへ濡れぬ か
くばかり もとなし恋ひば 古郷に この月ごろも ありかつましじ（四・七二三）

反歌

③朝髪所思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける（七二四）

右の歌は、大嬢の進る歌に報へ賜ふそ。

大伴坂上郎女、竹田庄より女子の大嬢に贈る歌二首（そのうちの一首）

④うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無しわが恋ふらくは（四・七六〇）

【家持（甥であり娘婿でもある）との交流】

大伴宿祢家持、（天平十八年）閏七月、越中国の守に任せらえ、即ち七月を以ちて任所に赴く。時に、姑大伴氏坂上郎女の、家持に贈る歌二首

①草枕旅ゆく君を幸くあれと斎瓮すゑつ吾が床の辺に（一七・三九二七）

②今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむする為方のなさ（三九二八）

姑大伴氏坂上郎女の、越中守大伴宿祢家持に來贈る歌二首

③常人の恋ふといふよりは余りにてわれは死ぬべくなりいたらずや（一八・四〇八〇）

④片思を馬にふつまに負せ持て越辺に遣らば人かたはむかも（四〇八一）

越中守大伴宿祢家持の報ふる歌、所心を并せて三首（そのうちの二首）

⑤天ざる鄙の奴に天人しかく恋すらば生ける験あり（四〇八二）

⑥常の恋いまだ止まぬに都より馬に恋ひ来ば荷ひ堪へむかも（四〇八三）

右は、四日に使に附けて京師に贈り上す。

【越中にいる娘へ】

京師より來り贈る歌一首 短歌并せたり

①海神の 神の命の 御櫛笥に 貯ひ置きて 齋くとふ 珠に益りて 思へりし 吾が
子にはあれど うつせみの 世の理と 大夫の 引のまにまに しな離る 越路を指
して 延ふ蔦の 別れにしより 沖つ波 撓む眉根 大船の ゆくらゆくらに 面影に
もとな見えつつ かく恋ひば 老づく吾が身 けだし堪へむかも（一九・四二二〇）

反歌一首

②かくばかり恋しくしあらば真澄鏡見ぬ日時なくあらましものを（四二二二）

右の二首は、大伴氏坂上郎女、女子の大嬢に賜へり。（天平勝宝二年）